

# 保育者養成課程に在籍する短期大学生の入学前教育の受けとめ方

—大学適応との関係から—

岩田 昌子・渋谷 郁子

## What and how do junior college students in the training course for early education and child care receive the pre-entrance education?

Focusing on its relationship to adaptation to college life.

Masako IWATA and Ikuko SHIBUYA

### 要旨

本研究は、平成23年度こども学専攻の入学者を対象に、入学前教育の受けとめ方が入学後の大学適応にどのような影響を与えたのか検討し、今後の入学前教育の実施方法に有益な示唆を得ることを目的として行われた。結果より、入学前教育から多くの情報を受け取ったと感じている学生ほど、ストレスを感じている度合いが低く、大学生活により適応していることがわかった。一方「教員との関係づくり」においては入学前教育の効果が顕著ではなかったことから、教員との交流の機会を増やしていくことが必要だと考えられた。また、資格取得を目的とした短期大学に特有の入学後の大学生活の厳しさをあらかじめ伝えることが効果的であると示唆された。

### 1. 問題と目的

近年、大学生が入学後にスムーズに大学生活に適応していけるよう、入学前教育や初年次教育などが多くの大学で行われ、その重要性が指摘されている<sup>1) 2)</sup>。これらは基礎学力を補うこと、専門教育への導入、人間関係づくりなどを目的としたものが多い。その背景として、新入生の学力の多様化<sup>2)</sup>や学習意欲の低さ、学習方略が身につけていないなどの修学面の課題<sup>3)</sup>、新しい対人関係を開始するといった対人面での課題<sup>4)</sup>などが挙げられている。特に入学前教育に関しては、文部科学省による平成25年度大学入学者選抜実施要項<sup>5)</sup>において「各大学は、入学手続きをとった者に対しては、必要に応じ、これらの者の出身高等学校と協力しつつ、入学までに取り組むべき課題を課すなど、入学後の学習のための準備をあらかじめ講ずることが望ましい。」とされ、入学予定者への支援が求められている。

保育者養成課程に特化して、大学入学前後の取り組みを概観すると、任意の養成校40校を対象に行った調査研究<sup>1)</sup>がある。この研究では28校から回答があり、入学前教育に関しては21校が、初年次教育に関しては17校が実施していると報告している。その上で、「保育者になりたい意欲」「基本的な生活習慣・マナー」「基本的な読み書き能力」といった内容で行われる入学前・初年次教育の導入率が高く、実施に対しておおむね肯定的に評価されていると述べている。また、課題提出型の入学前教育の実践<sup>6) 7)</sup>や、新入生同士・教員との顔合わせ、文章

表現能力・コミュニケーションスキルの確認と向上、ピアノ技術の向上、入学にあたっての学生の不安解消、保育士を目指す意欲の向上などを目的とした入学前教育の試み<sup>8)</sup><sup>9)</sup>などが報告されている。

これらの入学前教育の課題やプログラムを検討していく上では保育者養成を行う大学・短大ならではの入学後の適応についても検討する必要がある。保育者養成課程における大学適応に関しては、保育者志向や専門領域への興味との関連<sup>10)</sup><sup>11)</sup>や、対人ストレスとの関連<sup>12)</sup>を述べたものが多い。前者は保育者養成課程が、専門職への入り口としての側面を持つことに由来していると考えられる。保育者養成課程においては、単に大学文化に馴染めるかどうかということだけでなく、保育者文化に馴染んでいけるかどうか、プレ保育士アイデンティティ<sup>13)</sup>を獲得していけるかどうかということが、大学への適応に大きな影響を及ぼしているということであろう。

鈴鹿短期大学では、平成21年度入学者から入学前教育を実施している。平成24年度までに4年行われ、毎年その内容に改良を加え、入学者の大学適応への足がかりとなるよう努めてきた<sup>9)</sup>。しかし、それらの取り組みが、当事者である入学者にどのように受けとめられているのか、実際に入学後の大学適応の助けとなっているのかは定かではない。そこで本研究では、これらの点を明らかにするため、平成23年度こども学専攻の入学者を対象に、入学前教育の受けとめ方と入学後の大学適応を調べ、両者の関係を検討する。入学前教育によって、どの程度情報を得られたと感じているかを、入学前教育の受けとめ方の指標とする。「入学前教育によって多くの情報を得られたと感じている学生ほど、大学に適応している」ことが予測される。また、入学前教育の受けとめ方を詳細に検討することで、たとえば、入学前教育のどのような内容において、情報を得られたもしくはは得られなかったと感じている者が多いのか、入学前教育のどのような内容が大学適応と関係が深いのかなどを知ることができる。こうした情報は、今後の入学前教育の実施方法に、有益な示唆を与えてくれるものと考えられる。

## 2. 方法

### 2・1 調査対象

こども学専攻1年生73名（女性60名、男性13名、平均年齢18.96歳、18歳～38歳）を対象におこない、質問回答に欠損などがある者を除いた60名を分析の対象とした。

### 2・2 手続き

平成23年6月上旬の授業時に実施した。入学後2ヶ月経過したこの時期に調査実施したのは、次の2点からである。1点目としては、入学後ある程度の期間が経過し、大学や授業の様子などを十分つかめた段階で、入学前教育の受けとめ方および適応状態を確認したいと考えたことが挙げられる。2点目としては、大学適応に実習での体験が大きく影響すると考えられたため、実習前の影響がない段階で大学適応の状態を確認したいためである。

なお、対象者の受講した入学前教育は、平成22年12月下旬（1日）、23年2月上旬（1日）、3月下旬（2日）であった。

## 2・3 調査内容

### 2・3・1 入学前教育の受けとめ方

平成 23 年度入学前教育担当教員 2 名で、入学前教育の受けとめ方に関する質問紙を作成した。入学前教育においてねらいとした内容について、4 分野 8 カテゴリーを想定し（表 1）、50 の質問項目を作成した。これらに対し、「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの 5 件法で回答するように求めた。

表 1 入学前教育の受けとめ方に関する質問の分類

分野	カテゴリー	内容
大学文化	大学生意識の獲得	大学が学びの場であることへの理解や大学生になるという意識を持つこと
	大学文化の理解	単位習得の仕組みや学校方針やカリキュラムについての理解
対人関係	同級生との関係作り	一緒に学ぶ仲間との関係作り
	先生との関係作り	専攻の教員との関係作り
学習	大学基礎教育	聞き取りや書き取り、情報をまとめるなどのリテラシー教育や講義の雰囲気を知ること
	ピアノ導入	音符の読み方のミニ講義や実際のピアノレッスンなど
専門性	専門職の理解	保育者の実際の仕事について知ることや資格取得までの道のりの理解
	社会人マナー	現場で求められる保育者として、身に付けておく必要があるマナーについての理解

### 2・3・2 大学適応

大学への適応を多面的に捉えるために、適応の程度に影響を与えるストレスと保育者養成課程に特化した大学適応を測定することとした。

ストレスについては、国里ら（2007）<sup>14)</sup> の高校新入生ストレスサー尺度を使用した。本尺度は「クラス内の対人関係の困惑」「学習における困惑」「教師・学校に対する困惑」「恐怖・緊張」の 4 因子からなる尺度である。質問項目は「クラスメイトになかなか話しかけることができない」「学習の内容が難しい」「相談できる先生がいない」「こわい先生がいる」など 15 項目で、「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの 5 件法で回答するように求めるものであった。

本専攻では、資格取得に向け、限られた時間で多くの単位をとらなければならないため、時間割がほぼ決まっている。また、授業を受けるメンバーも学年全員のクラスもしくは番号順で分けられた 2 クラスとなっているため、受講メンバーもほぼ同じである。これらの特質から高校入学時のストレスと似通っていることが想定されたため、本尺度を採用した。

なお、これに伴い、一部表記を次のように変更している。「高校生活は楽しいことがない」を「大学生活は楽しいことがない」、「高校のルールに慣れるまで緊張する」を「大学のルールに慣れるまで緊張する」などである。

保育者養成課程に特化した大学適応については、小平（2011）<sup>11)</sup> の階層的大学コミットメント尺度を使用した。これは保育者養成短期大学における学生の大学コミットメントを階層的に

捉えた尺度で、大学適応、専門領域への興味、専門職への志向、職業の継続性の4階層から成り立っている。前者ほど、大学生活初期のコミットメントとされている。質問項目は「私はこの大学に入ったことを誇りに感じる」「保育の専門の授業はしっかりと聴くようにしている」「私は保育者になることを決めている」「保育者として働き続ける自信があまりない」などの16項目で、「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの5件法で回答するように求めるものであった。

### 3. 結果

#### 3・1 入学前教育の受けとめ方

入学前教育の受けとめ方 50 項目それぞれについて、逆転項目について処理を施した上で、平均値と標準偏差を算出した (表 2)。なお、50 項目すべての平均は 3.75、標準偏差は 0.53 であった。

表 2 入学前教育の受けとめ方についての結果

カテゴリー	項目	M	SD	肯定 (人)	否定 (人)	カテゴリー	項目	M	SD	肯定 (人)	否定 (人)
大学生意識の獲得	5 大学生になるんだという気持ちになれた	3.52	1.03	32	8	大学基礎教育	2 どんな勉強をするのか分かった	3.40	0.98	29	10
	6 大学は自分の責任で行動しなければいけないことが分かった	4.28	0.74	50	0		3 上級生の発表 (手遊び・エブロンシアター・運動遊びなど) で短大で身につける技術が分かった	3.88	0.80	43	3
	13 これからやらなければいけないことが具体的に分かった	3.58	1.01	32	7		10 情報をまとめる練習ができた	3.43	1.00	25	9
	15 上級生の話で学校生活について知ることができた	3.22	1.04	22	12		19 大学の勉強が大変そうだと分かった	4.15	0.76	47	0
	17 大学生活の厳しさを知らされた	3.83	0.89	40	3		23 みんなの前で発表する練習ができた	3.57	1.08	29	8
	25 大学生活への不安が減った	3.02	1.10	19	16		37 グループワークの体験ができた	4.27	0.71	51	0
	28 上級生の姿から自分たちが目指すべき姿が分かった	3.45	1.02	28	12		45 短大の授業の雰囲気が出た	3.92	0.83	41	2
	30 大学が学びの場だと感じられた	3.92	0.83	44	2		46 聞いて書き取る練習ができた	3.68	0.97	35	6
	39 大学生活が楽しみになった	3.42	1.08	28	9		48 専門科目の基礎に触れられた	3.67	0.93	35	4
大学文化の理解	18 どこにどんな教室があるのかわかった	3.32	1.24	28	18	ピアノ導入	11 ピアノへの不安が減った	2.85	1.36	21	24
	26 大学の単位習得の仕組みを知ることができた	3.35	1.04	30	11		24 ピアノへの取り組み方が具体的に分かった	3.97	0.97	40	3
	31 掲示板を見ることの重要性を知れた	4.15	0.96	43	3		38 ピアノの授業の雰囲気が分かった	4.28	0.85	49	2
	33 学校の方針が分かった	3.68	0.95	36	6		43 楽譜が以前より読めるようになった	4.15	0.97	41	1
	40 カリキュラムについて知ることができた	3.58	1.09	31	9	専門職の理解	7 保育者の大変さを知ることができた	4.45	0.77	54	2
44 先生の研究室が分かった	3.42	1.12	27	13	8 就職の厳しさを感じた		4.03	0.92	40	2	
同級生との関係作り	1 同級生と親しくなった	3.80	1.25	40	9		12 保育者になりたい気持ちが強まった	4.00	0.88	41	2
	14 友達を作れた	3.92	1.17	43	7		20 保育者の実際の仕事内容を知ることができた	3.55	0.98	32	10
	27 どんな同級生と一緒に学ぶのかわかった	3.90	0.92	41	3		21 実習の大変さを知った	3.47	1.17	29	11
	41 同級生と話ができた	4.23	0.89	48	3		34 保育者のやりがいを知ることができた	3.88	0.83	40	2
49 他の人とあまりしゃべれなかった	3.10	1.13	22	18	35 保育者を目指すうえでできなかったらいけないことが分かった	4.05	0.83	45	2		
関係先生との関係作り	4 先生と親しくなった	2.98	1.02	16	15	47 どうしたら資格が取れるのか分かった	3.88	0.94	39	3	
	16 どんな先生がいるのか分かった	3.97	0.92	45	4	社会人マナー	9 挨拶の重要性を知った	4.20	1.02	51	4
	29 先生と会話ができた	3.50	1.02	31	9		22 約束を守ることの重要性を知った	4.30	0.78	48	0
	50 先生と交流ができた	3.30	1.01	23	10		32 大人としての言葉遣いについて学べた	3.70	1.00	33	7
					36 身だしなみを清潔にすることの重要性を知った		4.17	0.85	47	2	
					42 人の話を聞くことの重要性を知った		4.23	0.74	49	0	

n=60

その上で肯定的な回答（「非常に当てはまる」「やや当てはまる」）を選択した人数と、否定的な回答（「やや当てはまらない」「まったく当てはまらない」）を選択した人数を求めた。Fisherの正確確率計算に基づき、肯定的な回答と否定的な回答が同程度、もしくは、否定的な回答が肯定的な回答を上回った4項目を抽出した。それらは、「4. 先生と親しくなれた」「11. ピアノへの不安が減った」「25. 大学生活への不安が減った」「49. 他の人とあまりしゃべれなかった」であった。

一方、特に肯定的な回答が多かったのは、「6. 大学は自分の責任で行動しなければいけないことが分かった」「7. 保育者の大変さを知ることができた」「37. グループワークの体験ができた」「42. 人の話を聞くことの重要性を知った」であった。

入学前教育の受けとめ方の各カテゴリについて Chronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha = .66 \sim .84$  となり、一定程度の内的整合性が確認された。各カテゴリの平均値と標準偏差は表3の通りとなった。

表3 入学前教育の受けとめ方のカテゴリごとの  $\alpha$  係数、平均値、標準偏差

分野・カテゴリ	$\alpha$ 係数	平均	SD
大学文化			
大学生意識の獲得	0.80	3.58	0.61
大学文化の理解	0.70	3.58	0.68
対人関係			
同級生との関係づくり	0.82	3.79	0.83
教員との関係づくり	0.84	3.44	0.81
学習			
大学基礎教育	0.80	3.79	0.55
ピアノ導入	0.66	3.81	0.74
専門性			
専門職の理解	0.79	3.89	0.58
社会人マナー	0.78	4.11	0.64

n=60

### 3・2 高校新入生ストレス尺度

新入生のストレスがどのような因子によって構成されているのかを改めて捉えるために、高校新入生ストレス尺度15項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を実施した。因子数は固有値1以上、因子負荷量.40以上であることを基準として決定した。先行研究と同様に4因子が抽出されたが、因子構造が異なったため、それぞれ「学校での不安・違和感（5項目）」「孤立感（3項目）」「学習への不応感（3項目）」「教員との付き合いにおける困難さ（2項目）」と命名した（表4）。Chronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha = .72 \sim .84$  となり、いずれの因子においても一定程度の内的整合性が確認された。因子ごとの平均値、標準偏差は表5の通りであった。

### 3・3 階層的大学コミットメント尺度

コミットメントのありようがどのような因子によって構成されているのかを改めて捉えるた

表 4 高校新入生ストレス尺度の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

	F1	F2	F3	F4	共通性
<b>【学校での不安・違和感】 <math>\alpha = .821</math></b>					
怖い先生がいる	<b>.775</b>	-.180	.048	.041	.566
大学のルールに慣れるまで緊張する	<b>.714</b>	-.078	.072	.005	.524
学科の学習内容が思っていたものとは違う	<b>.710</b>	.092	.162	-.001	.746
先輩が怖い	<b>.510</b>	.102	-.092	-.008	.263
学習内容に興味がわからない	<b>.501</b>	.109	.223	-.002	.512
<b>【孤立感】 <math>\alpha = .838</math></b>					
こども学の仲間の雰囲気になじめない	.207	<b>.843</b>	.017	-.107	.833
こども学専攻の中で親しい友達ができない	-.110	<b>.758</b>	-.065	-.109	.426
こども学と一緒に学ぶ仲間になかなか話しかけることができない	.039	<b>.721</b>	-.167	.180	.614
大学生活は楽しいことがない	-.175	<b>.667</b>	.298	.103	.641
<b>【学習への不適応感】 <math>\alpha = .781</math></b>					
授業のペースについていけない	-.109	.003	<b>.864</b>	.158	.794
学校全体が自分の持っているイメージとは違う	.167	-.025	<b>.734</b>	-.103	.607
勉強の仕方が分からない	.029	-.080	<b>.507</b>	.278	.450
学習内容が難しい	.127	-.013	<b>.466</b>	-.120	.238
<b>【教員との付き合いにおける困難さ】 <math>\alpha = .715</math></b>					
先生とうまく付き合っていない	.204	.034	-.182	<b>.939</b>	.999
相談できる先生がいない	-.144	-.050	.263	<b>.578</b>	.406
累積寄与率(%)	25.1	42.6	52.0	57.5	
因子間相関	F1	F2	F3	F4	
	F1	-.	.493	.574	.576
	F2		-.	.406	.509
	F3			-.	.498

表 5 高校新入生ストレス尺度の因子ごとの平均値、標準偏差

因子名	平均	SD
学校での不安・違和感	2.48	0.84
孤立感	2.03	0.89
学習への不適応感	3.17	0.79
教員との付き合いにおける困難さ	2.56	0.93

n=60

めに、階層的大学コミットメント尺度 16 項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を実施した。因子数は固有値 1 以上、因子負荷量 .40 以上であることを基準として決定した。結果、先行研究では 4 因子であったが、本研究では 3 因子構造となり、「専門職への志向」と「職業継続性」に含まれていた質問項目が一つの因子にまとまった。そのため、この因子を「職業動機づけ (6 項目)」と命名した。Chronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha = .64 \sim .86$  となり、いずれの因子も一定程度の内的整合性が確認された (表 6)。因子ごとの平均値、標準偏差は表 7 の通りであった。

表 6 階層的大学コミットメント尺度の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

	F1	F2	F3	共通性
<b>【職業動機づけ】 <math>\alpha = .861</math></b>				
保育者になるかどうかまだ迷っている	<b>.942</b>	-.087	-.148	.754
私は保育者になることを決めている	<b>.887</b>	-.009	.028	.807
私は人よりも長く保育の仕事が続けると思う	<b>.676</b>	-.089	.011	.444
保育の仕事をしてできるだけ長く続けていきたい	<b>.622</b>	-.158	.347	.657
保育者として働き続ける自信があまりない	<b>.541</b>	.148	-.074	.309
時期がきたら、保育者になるために就職活動をするつもりである	<b>.516</b>	.344	-.015	.453
<b>【大学適応】 <math>\alpha = .647</math></b>				
毎日、大学に通うのが楽しい	.020	<b>.810</b>	-.286	.572
大学で友人たちと会えるのがうれしい	-.175	<b>.600</b>	.150	.406
この大学は私にあっていていると思う	.087	<b>.567</b>	-.044	.332
<b>【専門領域への興味】 <math>\alpha = .638</math></b>				
保育の専門の授業はおもしろい	-.026	.363	<b>.688</b>	.767
保育に関係した本を自主的に読むことがある	-.084	-.273	<b>.675</b>	.359
保育の専門の授業はしっかりと聴くようにしている	.173	.161	<b>.484</b>	.440
累積寄与率(%)	32.0	44.9	52.5	
因子間相関	F1	F2	F3	
	F1	-.224	.483	
	F2	-	.363	

表 7 階層的コミットメント尺度の各因子ごとの平均値、標準偏差

因子名	平均	SD
大学適応	3.73	0.70
専門領域への興味	3.52	0.71
職業動機づけ	3.87	0.81

n=60

### 3・4 入学前教育の受けとめ方および高校新入生ストレス尺度、階層的大学コミットメント尺度との関連

#### 3・4・1 入学前教育の受けとめ方と高校新入生ストレス尺度との相関

入学前教育の受けとめ方と高校新入生ストレス尺度との単純相関を調べた結果、表 8 の通りとなった。「同級生との関係づくり」および「社会人マナー」を除き、おおむね有意な負の相関が認められた。「同級生との関係づくり」は孤立感と、「社会人マナー」は学校での不安・違和感とのみ有意な負の相関が認められた。

このうち中程度の相関を示したものは次の 5 組である。「大学生意識の獲得」と学習への不適応感 ( $r = -.409$ )、教員との付き合いにおける困難さ ( $r = -.455$ )、「大学文化の理解」と教員との付き合いにおける困難さ ( $r = -.410$ )、「同級生との関係づくり」と孤立感 ( $r = -.559$ )、「教員との関係づくり」と学習への不適応感 ( $r = -.524$ )、教員との付き合いにおける困難さ ( $r = -.448$ )であった。この結果、入学前教育においてさまざまな情報を受け取ったと感じている学生ほど、入学後のストレスがおおむね少ないことがわかった。

表8 入学前教育の受けとめ方と高校新入生ストレス尺度との相関係数

	高校新入生ストレス尺度			
	学校での不安・違和感	孤立感	学習への不応感	教員との付き合いにおける困難さ
大学文化				
大学生意識の獲得	-0.295 *	-0.336 **	-0.409 **	-0.455 **
大学文化の理解	-0.340 **	-0.159	-0.385 **	-0.410 **
対人関係				
同級生との関係づくり	-0.133	-0.559 **	-0.138	-0.154
教員との関係づくり	-0.376 **	-0.133	-0.524 **	-0.448 **
学習				
大学基礎教育	-0.257 *	-0.089	-0.211	-0.330 **
ピアノ導入	-0.259 *	-0.278 *	-0.372 **	-0.301 *
専門性				
専門職の理解	-0.404 **	-0.149	-0.269 *	-0.309 *
社会人マナー	-0.313 *	-0.082	-0.153	-0.165

\*\*p<.01, \*p<.05

### 3・4・2 入学前教育の受けとめ方と階層的大学コミットメント尺度との相関

入学前教育の受けとめ方と階層的大学コミットメント尺度との単純相関を調べた結果、表9の通りとなり、おおむね有意な正の相関が見られた。相関係数が0.400～0.599までの中程度の相関を示したものは次の13組である。「大学生意識の獲得」と大学適応 ( $r=.596$ )、専門領域への興味  $r=-.419$ 、「学校文化理解」と大学適応 ( $r=.405$ )、専門領域への興味 ( $r=.419$ )「同級生との関係づくり」と大学適応 ( $r=.572$ )、「教員との関係作り」と大学適応 ( $r=.413$ )、「大学基礎教育」と専門領域への興味 ( $r=.529$ )、「ピアノ導入」と大学適応 ( $r=.536$ )、専門領域への興味 ( $r=.542$ )、「専門職の理解」と専門領域への興味 ( $r=.460$ )、職業動機づけ ( $r=.480$ )、「社会人マナー」と専門領域への興味 ( $r=.438$ )、職業動機づけ ( $r=.465$ )であった。

この結果、入学前教育においてさまざまな情報を受け取ったと感じている学生ほど、大学生活に適応できていたり、専門領域への興味が高く、保育者への職業動機づけも高いことがわかった。

### 3・4・3 高校新入生ストレス尺度と階層的大学コミットメント尺度との相関

高校新入生ストレスの4因子は、いずれも大学適応との間に有意な負の相関を示した(表10参照)。また、学校での不安・違和感は、専門領域への興味および職業動機づけとの間に有意な負の相関を示した。高い負の相関を示したものは、孤立感と大学適応 ( $r=-.662$ )であった。

この結果、さまざまな新入生ストレスの強い者ほど大学に適応できていないと感じることがわかった。また、学校での不安・違和感が強い者ほど、専門領域への興味や職業動機づけが低いことがわかった。



表 9 入学前教育の受けとめ方と階層的大学コミットメント尺度の相関

	階層的大学コミットメント尺度		
	大学適応	専門領域への興味	職業動機づけ
大学文化			
大学生意識の獲得	0.596 **	0.419 **	0.376 **
大学文化の理解	0.405 **	0.419 **	0.292 *
対人関係			
同級生との関係づくり	0.572 **	0.177	0.128
教員との関係づくり	0.413 **	0.372 **	0.224
学習			
大学基礎教育	0.345 **	0.537 **	0.387 **
ピアノ導入	0.536 **	0.542 **	0.333 **
専門性			
専門職の理解	0.339 **	0.473 **	0.465 **
社会人マナー	0.295 *	0.438 **	0.465 **

\*\*p<.01, \*p<.05

表 10 高校新入生ストレス尺度と階層的大学コミットメント尺度との相関係数

	大学適応	専門領域への興味	職業動機づけ
学校での不安・違和感	-0.256 *	-0.313 *	-0.377 **
孤立感	-0.662 **	-0.046	-0.095
学習への不適応感	-0.354 **	-0.244	-0.160
教員との付き合いにおける困難さ	-0.349 **	-0.125	-0.234

\*\*p<.01, \*p<.05

## 4. 考察

### 4・1 入学前教育の受けとめ方と大学適応について

入学前教育によって多くの情報を得られたと感じている学生ほど、大学に適応しているという仮説は以下の二点より支持された。第1に入学前教育の受けとめ方と高校新入生ストレス尺度との間に有意な負の相関が認められた。第2に、入学前教育の受けとめ方と大学適応および専門領域への興味や職業動機づけといった階層的大学コミットメントとの間に有意な正の相関が認められた。すなわち、入学前教育において多くの情報を得られたと受けとめている学生ほど、大学生活が2ヶ月経過した時点で大学に適応していることが示された。

入学直後は誰もが過剰に適応しようとしていたり、不安になっていることが推測される。今回は入学後2ヶ月経過している時点での調査であり、異文化への参入が一段落つくことが望まれる時期と考えている。また、本学においては、この時期が入学後の次の課題である保育所実習の直前となる。この時期に大学生活に適応できていることが、新たな課題へ挑戦する上での足場となり、実習での躓きを防ぎ支えとなる可能性も含んでいると考え、この時期の適応は重要である。濱名<sup>15)</sup>は初年次教育の効果について述べる中で「大学1年生で適応したものが3年秋段階でも適応性が継続する傾向が強く、(中略)1年生、中でも春学期段階での早期適

応が、その後のキャンパスでの学習や生活に大いにプラスになっている」としている。本学において、入学前教育が入学2ヵ月後の適応に一定の効果があることが確認された。ゆえに、その後の長期的な大学適応の土台形成としての入学前教育の可能性を示せたものとする。今後は、この時期の大学適応のありようが、実習をはじめその後の大学生活全般での適応につながっていくのか検討が必要である。

ところで、本調査では入学前教育の受けとめ方について、ストレスや適応と同一時期に調査している。このため、適応状態の良い学生が入学前教育についての受けとめ方をよいものであったと答えている可能性がある。また、入学前教育の受けとめ方が時期によって異なる可能性もあり、これらの点についても検討が必要である。

## 4・2 入学前教育の実施方法を検討する材料の提供

### 4・2・1 教員と学生の交流の機会の不足

入学前教育の受けとめ方において、「先生と親しくなれた」という質問項目で否定的な回答が多かった。このことより、教員と学生の交流の機会が不足していた可能性がうかがわれる。今回のプログラムでは、大学基礎教育において、グループワーク形式での先生紹介があり、教員について知ることはできたが、親しくなることまでは難しかったようである。本研究において、入学前教育における「教員との関係づくり」は新入生ストレスの学習への不適應感および、階層的コミットメントの大学適応との間で、それぞれ他の項目と比較していくぶん高い相関を示した。新入生オリエンテーションにおける教員との親密化が、大学生生活の満足感につながることを指摘した研究<sup>16)</sup>もあることから、より教員と親しくなれるようなプログラム内容への変更が効果的と考える。

また、「大学生意識の獲得」「大学文化の理解」が新入生ストレスの「教員との付き合いにおける困難さ」とそれぞれ他の項目と比較していくぶん高い相関を示した。高校生活までの教員との付き合いのあり方と、大学での教員との付き合いのあり方はいくぶん異なる。高校までは生活面での指導が、大学と比較してより高い比重があったと考えられる。これに対し、大学では生活面での自立性が求められ、本来は主として学問を媒介とした指導が中心になると考えられる。その違いの良し悪し、また生活面での指導の必要性は別としても、これらの教員のスタンスの違いが、学生にとっての違和感や心理的な距離の遠さ、さみしさとして感じられる可能性がある。その意味において、大学文化を早い時期に理解していってもらふ工夫は必要であろう。

### 4・2・2 大学の厳しさを知ること

入学前教育の受けとめ方において「大学は自分の責任で行動しなければいけないことが分かった」という質問に肯定的な回答が多かった。また、学びに関する項目「大学の勉強が大変そうだと分かった」「短大の授業の雰囲気分かった」「ピアノの授業の雰囲気が分かった」「大学が学びの場だと感じられた」においても、肯定的な回答が多かった。さらに、これらの項目を多く含む大学生意識の獲得のカテゴリーは大学適応との間に高い相関が見られた。このことか

ら、多くの者が大学の厳しさや大学が学びを主体とした場であるということを理解したことがうかがえる。また、しっかりと受けとめた者ほど、大学への適応も良好である可能性も示唆された。

その一方で、「ピアノへの不安が減った」「大学生活への不安が減った」などの項目では否定的な受けとめ方をした者が多かったが、これは大学の厳しさを知った結果、かえって不安になったり、不安が解消できなかったものと考えられる。しかし、入学前教育受講前の不安と、受講後の不安は内容が異なる可能性もある。先のわからない不安から、厳しさに対応できるのかといったより具体的な不安へと変わっている可能性もある。また、不安が良い意味での緊張感となっている可能性もある。

短期大学において保育士および幼稚園教諭の資格を取得する場合、相当数の単位を取得することが必要となる。さらに実習もあるため、長期休暇中も含めて、自由になる時間が非常に少なく、4年制大学とは忙しさがまったく異なる。

これらの現状も踏まえ、実際に大学生活が始まる前に、大学の厳しさを伝え、ある程度の緊張感を持たせ、大学生としての「構え」を作ることが、入学後のリアリティショックを和らげることにともつながり、その後の適応にも有効であると考えられる。

## 5. 今後の課題

本研究では、入学前教育の受けとめ方に関する質問を、入学後2ヶ月が経過した時点で、大学適応に関する質問と同時に行った。このため、入学後の大学適応のありようが、入学前教育の受けとめ方に影響を及ぼしている可能性が残された。加えて、入学前教育から時間がたっているために、記憶がゆがめられている可能性もある。これらの問題を解消するためにも、入学前教育の実施から日の経たない時期に、受けとめ方について調査する必要がある。

また、本専攻においては、保育所実習が入学からおよそ2ヶ月後に始まり、大学への適応もしくはコミットメントに大きく影響を与える。実習開始前の適応状態により実習の受けとめ方が異なるのか、適応のどの側面が実習で困難にぶつかった時の効果的な支えとなりうるのか等を確認したい。その上で、大学生活全般に渡る長期的な大学適応の様相を明らかにしていきたい。

## 引用文献

- 1) 上田敏丈、富田昌平 (2010) 保育者養成校における入学前・初年次教育の現状に関する調査、中国学園紀要、9、63-72
- 2) 小林 俊公、渡会 征三 (2006) : 推薦入試入学予定者の数学入学前教育とその効果、工学・工業教育研究講演会平成18年度講演論文集、208-209
- 3) 神籾貴昭、石村雅雄 (1999) : 高等学校と大学の接続に関する研究(その1)-学生の高等学校と大学における学業についての差異の認識の観点から-、京都大学高等教育研究、5、23-39
- 4) 鶴田和美 (2002) : 大学生とアイデンティティ形成の問題、臨床心理学、2・6、725-730
- 5) 文部科学省 (2012) : 平成25年度大学入学者選抜実施要項

- 6) 太田裕子、松田知明 (2011) : 短期大学の保育者養成課程における入学前教育の検討、羽陽学園短期大学紀要、9・1、97-107
- 7) 太田裕子、松田知明、花田嘉雄 (2012) : 短期大学の保育者養成課程における入学前教育の検討(2) : プレキャンパスの実施に着目して、羽陽学園短期大学紀要 9(2)、243-256
- 8) 坂田温志、伊藤佐陽子、加藤善朗 (2008) : 保育士養成校における入学前教育の試み、全国保育士養成協議会第47回研究大会 研究発表論文集 230-231
- 9) 岩田 昌子 (2011) : 短期大学の保育者養成課程における入学前教育の効果ー入学直後の大学適応を指標としてー 生活コミュニケーション学、2、3-13
- 10) 多川 則子、大嶽 さと子、吉田 俊和 (2009) : 保育者養成短期大学における学校適応感(1) 保育者志向との関連、日本教育心理学会総会発表論文集、51、658
- 11) 小平 英志 (2011) : 大学適応の階層性に関する検討 保育系短期大学生を対象に、日本福祉大学子ども発達学論集、3、59-69
- 12) 大嶽 さと子、多川 則子、吉田 俊和 (2009) : 保育者養成短期大学における学校適応感(2) ひとりぼっち回避規範 対人ストレスの観点から、日本教育心理学会総会発表論文集、51、659
- 13) 上田敏丈、石川昭義、阿部和子、高橋貴志、平山祐一郎 (2008) : 保育士としての学びの基本姿勢、全国保育士養成協議会、保育士養成システムのパラダイム転換Ⅲー成長し続けるために養成校でおさえておきたいことー 保育士養成資料集第48号、76-88
- 14) 国里愛彦、長原啓三、浅本有美、伊藤有里、鈴木伸一 (2007) : 入学時のストレスと学校不適応との関連ー高校新入生ストレス尺度の作成ー 日本教育心理学会総会発表論文集 49、610
- 15) 濱名篤 (2007) 日本における初年次教育の位置づけと効果 リクルート カレッジマネジメント 145、7-8月号、4-9
- 16) 坂田浩之、佐久田裕子、奥田亮、川上正浩 (2007) : 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生生活満足感との関連性について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要、6、45-54